

## E 「ヒュームとスミス」(スコットランド啓蒙思想研究)

世話人 篠原 久 (関西学院大学・名)

報告者 前田俊文 (久留米大学)・生越利昭 (兵庫県立大学・名)

リプライ 門 亜樹子 (京都大学経済研究科ジュニアリサーチャー)

### セッション趣旨

スコットランド啓蒙思想」の多面的研究が本セッションの主要テーマであり、今回はバルベラックの思想像に焦点を当てた門亜樹子氏の新著『啓発された自己愛——啓蒙主義とバルベラックの道德思想』(京都大学学術出版会、2019年)をとりあげ、自然法思想、道德思想、キリスト教思想、およびスコットランド啓蒙思想との関連性をめぐって、同書の合評会を開催した。

### 前田氏による質問

- 1 神学と自然法学の関係について。バルベラックは「啓示神学から自然法学を開放しようとした」プーフェンドルフの意図に賛成していたのか、あるいは聖職者批判をすることで真のキリスト教道德としての自然法学を構築したかったのか。
- 2 プーフェンドルフとバルベラックは決疑論者なのか、あるいは決疑論の批判者なのか。アダム・スミスは『道德感情論』で決疑論を批判する際にプーフェンドルフやバルベラックを名指ししているが、プーフェンドルフやバルベラックはそれぞれの観点から「決疑論」批判を行っているように思われる。
- 3 「啓発された自己愛」は、「洗練(計算された)自己愛」と読み替え可能のように思われ、自己愛と社会性との関係をめぐる、17世紀と18世紀を橋渡しする過渡的なロジックであったのではないか。
- 4 その他、グロティウスとプーフェンドルフに対するバルベラックの評価、プーフェンドルフ=ライブニッツ論争等に関する若干のコメント。

### 生越氏による質問

- 1 「社交性と両立可能な自己愛」としての「啓発された自己愛」概念をめぐって。自己愛(利己心)の制御をめぐる二つの系譜(自己愛は初めから自然法によって制御されるとする伝統的な系譜と、自己保存を貫徹しつつ他者との調和を模索する個人主義的な系譜)との関連において、バルベラックはどのように位置づけられるのか。

2 バルベラックのキリスト教的人間像について。キリスト教的人間像に関する著者の真意は、人間の主体的能力（理性や感覚）を信頼しつつも、信仰によらなければ理性的被造物たる人間は完結しないということであるように思われるが、それでは理性と信仰はどのようなバランスで維持されるのか、また理神論とはどのように違うのか。

3 コモンセンス哲学との関係について。ビーティやキャンブルは、明証は直観的で、それを可能にするのが「常識」もしくは「第一原理」だと主張するが、その根拠はなにか。それが結局「神からの賜物」を根拠とするのであれば、最初から結論ありき、とならないだろうか。また、カドワースをカントの先駆者として見て、ロックの「反省の機能」を重視する D.ステュアートの理解に従えば、イギリス哲学からカントまで連続的な系譜が存在することになり、これまでの通説を覆すことになるが、それは正しいのか。

### 門氏からのリプライ

1 両報告者共通の質問（「啓発された自己愛」）に関して。ピエール・ニコルも「啓発された自己愛」という表現を使用しているが、これは「愛徳を偽装した自己愛」を意味しており、バルベラックの「健全な自己愛」としての「啓発された自己愛」とは内容が異なる。『娯楽論』においては、自己愛が人類愛または博愛心を含むことを示唆する箇所がある。ここで言及されている「自己愛」は、他人に損害を与えてはならないという意味での社交性を人類に命じる、「正しい理性」に基づく「啓発された自己愛」である。このような自己概念は、アリストテレスの友愛（ピリアー）すなわち「相互応報的な好意」に通じるものがある。バルベラックの人間本性の同一性を基礎とする「啓発された自己愛」の源泉は（キリスト教ではなく）古代ギリシャに遡ることができると考えられる。ミシェル・フーコーの『主体の解釈学』において、古代ギリシャの哲学者とキリスト教思想家における「自己への配慮」という概念の変遷・系譜が探られるなかで、その初期の肯定的側面が失われて、自己放棄の義務と他者への義務という「非・自己中心主義」的道德が形成されていく「逆説的」な帰結が示されている。この点で聖職者たちの逸脱した傾向を批判したバルベラックの思想との共通性を感じることができるよう思われる。

#### 2 前田報告に対するリプライ

- ① 神学と自然法学の関係。バルベラックは、プーフェンドルフが自然法学と道德神学の区別を強調することに対して異議を唱えているのであり、キリスト教聖職者による「自然法の科学」批判に対し、神学的基礎付けを与えるという意図があったと考えられる。
- ② 決疑論者の問題。バルベラックによれば、決疑論者のたちは「無益な空理空論において、先人たちを出し抜くことだけを自らの主要な業績とした」のであって、広義の意味での決疑論を指しているように思われる。ジョン・ロバートソンによれば、カトリックにお

ける「自由意志の問題への関心が、個人の行動に関わる特定の道徳的問題に導きの糸を与えようとする決疑論への関心の高まりを促した」のであった。

### 3 生越報告に対するリプライ

- ① キリスト教的人間像について。バルベラックのキリスト教的人間像は、ティロットソンにも共通してみられ、理性への懐疑論を批判するものであり、彼らにおける「信仰」は、理性または感覚を前提としていた。また最近の研究では、「理神論者」という用語の曖昧さが指摘されており、バルベラックの思想を理神論者か否かという観点から整理することの有効性について、疑問が残ると考えられる。
- ② コモンセンス哲学との関係について。(i) ビーティにおける「第一原理」とは「それ自身の明証によって知られている自明の原理」であって、この第一原理を知覚する力能がコモンセンスだとされている。(ii) ビーティによれば、外部の事物についての我々のすべての知識は外部感覚の明証に依存し、この感覚作用は、われわれの基本構造 (constitution) によって、外部的存在についての信念を伴うものである。(iii) イギリス哲学は経験論で、カント哲学は、知識の源泉を感覚のみに求める経験論に「知性 (悟性、ノエーマタ)」の役割を認めたものであった。D.ステュアートは、この知性の役割を強調したケンブリッジ・プラトニストの存在に言及し、これをカント哲学の先駆者だと指摘した。経験に先立つ人間精神の基本構造を重視する点で、カント哲学とスコットランドのコモンセンス哲学との類似性を指摘したかったものと考えられる。

---

当セッションへの参加者は十数名であった。 (篠原 久)